

ペン俳句会 句会報(第三七二号)

令和七年八月七日(木)

兼題『緑蔭(緑陰)』、席題『落』

句会を、先月七月と同じ場所で開催。投句九名。  
出席八名。(欠席は良知さん、金魚姫さん)

中村 晃也

病葉を少し混ぜる夏落葉

風鈴の知らせる風の通り道

緑蔭や太極拳の一呼吸

陽の落ちて小さな秋の動きけり

一匹が鳴いて全山蝉しぐれ

夏の星崩落続く噴火口

浜口 金魚姫

行き先は緑陰任せ一列に

向日葵を真似てすつくと横に立つ

電線に鳩同じ向き秋近し

落ち蝉をうつ伏せにして甦れ

子と競ふ手花火の玉落ちるまで

せみせみせみ五臓六腑に蝉の声

宮原 凧

蔓先の目指す明日や振じり花

虹立つや雨つづの落つアスファルト

丑三つの五体散乱熱帯夜

亡き夫の声聞き戻る昼寝覚

黒南風や本降りとなる午後の無為

緑蔭のベンチに拵げ俳句帖

大津 そうかい

雲の峰儂にも出来しオムライス

人は皆最期は一人蟻地獄

タワー下の帝都平伏す溽暑かな

儂きは月下美人の昼下り

緑蔭やしばし白帆の夢に落ち

落陽へなむあみだぶつ広島忌

安藤 晃二

緑蔭や沢に戯る蟹の群れ

緑蔭やテニススコートの笑い声

熱帯夜の句作引つ提げ中央線

潮騒や鋸山に夏陽落ち

蔓薔薇のシュートは天へ伸ぶ大暑

夏宵や果てずに交はず貨幣論

新田 ゆふき

緑蔭や大中小の白帽子

蚊の落ちて万物霊長くつろげり

剥落の築地を洗ふ青時雨

マウンドの背に落日甲子園

陽に白き長押磨かむ蝉時雨

夕立のヨーイソーレと降りにけり

長尾 進一郎

夏休み宿題の夢いまだ見る

七月の太陽遠慮せず主役

雷の落ちし気配や隣町

雑草の伸びや草取り追ひつかず

電柱の揺らぎて見ゆる炎暑かな

緑蔭に仲間の集ふ昼食会

松田 一文字

刃を入れし途端西瓜の割れにけり

夏歌舞伎奈落の底にある苛酷

尾を曲げて水面をたたく蜻蛉かな

鍾乳洞出でて地獄の炎暑かな

緑蔭のベンチに一人鳩一羽

秋めくや畑の葉物の色変わり

西川 知世

一輪車漕ぐ少年の夏休み

燈ともして緋の色の濃き水中花

大宰忌の町の灯小さしカフェの椅子

風止んで地に華やげる花ざくろ

風鈴の舌に短冊風に沿ひ

津波あと遺せる校舎蝉しぐれ

次回は令和七年九月四日(木)。兼題は「虫全般」  
(中村晃也さん出題)、席題は西川知世さん出題  
の「渡」です。

(追記)

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

兼題を出す時、全般という場合は少ない。今回は「虫全般」。「虫一切」という言葉よりだいぶ広い感じがする。歳時記や季寄せを開くと秋の項には、虫・虫の声・虫籠・虫壳・虫選び…といわゆる鑑賞の虫に関する言葉が並ぶ。「一切」はその項目に加えて虫のつくその時期の季語も入るという約束事である。季語のいうところの「秋の虫」は鳴くことが第一優先であるので、例えば、蟋蟀(こおろぎ)、鈴虫、松虫など秋に鳴く虫一切が兼題となる。「菜虫」というのは蝶の幼虫のことで、秋の季語に別に立つ鳴かない虫なので入らないが、今回は虫全般であるから大丈夫。

今回は虫全般であるから大丈夫。歳時記によつては何処までと線曳きは難しい題かもしれない。ペン俳句会の題として鷹揚な題が並ぶのも特徴的。歳時記を読み込むには濃い題であろう。句会を楽しみにしたい。

|                |        |
|----------------|--------|
| 行水の捨て所なき虫の声    | 鬼 貫    |
| 蓑虫の父よと鳴きて母もなし  | 高浜虚子   |
| 虫の声月よりこぼれ地に満ちぬ | 富安風生   |
| 松虫や子等静まれば夜となる  | 阿部みどり女 |
| 蟋蟀が深き地中を覗き込む   | 山口誓子   |
| わが胸の骨息づくやきりぎりす | 石田波郷   |
| 邯鄲や日のかたぶきに山嵐   | 飯田蛇笏   |
| 門をかけて見返る虫の闇    | 桂 信子   |

|                |       |
|----------------|-------|
| 虫鳴いて裏町の闇やはらかし  | 楠本憲吉  |
| 虫の夜の名札付けたる男下駄  | 飯田龍太  |
| 蓑虫の寝ねし重りに糸ゆれず  | 能村登四郎 |
| 鏡の面蟬遊の居て落着かず   | 岡本 眸  |
| 松虫や背の児は深き海のぞく  | 加藤知世子 |
| 虫壳の灯ともしてより闇匂ふ  | 小林康治  |
| 虫籠吊る野より淋しき十階に  | 有馬ひろ子 |
| 残る虫無人灯台影長き     | 水原春郎  |
| 菜虫とる顔色悪き男出て    | 波多野爽波 |
| 鳴きすぎて鈴虫外へ出されけり | 宮澤眞砂美 |